

深イ〜話!

No.21

シドニー五輪で金メダルを取った高橋尚子選手が、初めて小出義雄監督率いる積水化学の門を叩いた日のことを、監督はこのように述懐しています。

「Qちゃん（高橋選手のこと）を入れるのはためらったんですよ。実績もないし、大学を出ていて年をとっていたから」
それでも、入社を許したのは
『走りたい。そのためならお給料もいらぬ。』という健気けなげさに心動かされたからだったといひます。

もう一人、小出監督が育てたオリンピックメダリストがいます。バルセロナ五輪で銀、アトランタ五輪で銅を取った有森裕子選手です。生まれつきの股関節脱臼、さらに幼少期の交通事故の後遺症でうまく走れない。しかし、何度も電話をかけて入門を請う熱意に負け、小出監督は「次期マネージャー候補」として入社させました。

入社後、案の定、毎日チームの一番最後をトコトコ走っていた有森選手でしたが、ある日、小出監督に願ひ出ます。
『監督、私をオリンピックに連れて行ってください。
そのためだったら、どんな練習にも耐えます。ほかの人が1時間練習するなら、私は2時間がんばれます。』

小出監督は、監督人生で得た実感をおのうに振り返ります。
「勧誘した子は強くならなかつた。一銭もかけなかつたのが強くなっている。要するに、志の差ですよ。」

人間に能力の差というものは確かに存在するのかもしれない。しかし、能力の差だけで勝負が決まってしまうほど、人生はつまらないものではないということをお、有森選手や高橋選手のエピソードは教えてくれています。

能力の差を越えるのは志——。大志を抱き、それに向かつて着実に歩いていきたいものです。